

並び夜坐

道場では毎晩一旦布団に入ったあと、坐布ざふを担いで禅堂を出る。夜坐やざといって自主的な坐禅を外で組みに行くのだが、大抵坐布は頭に載せていくため、その姿は異様である。犬がシルエツトだけ見たら、巨大な頭の化け物と思って吠えること請け合いだ。

普段はどこで坐ってもいいから、それぞれお気に入りの場所に向かう。池の畔ほとりの岩の上だったり、奥まった建物の廊下だったりする。しかし月に一度の摂心せつしんという一週間だけは別で、みな本堂の廊下に一列に並んで坐らなければならない。これを「並び夜坐」と称する。

自由な夜坐と違って動くこともままならないし、禅堂に戻る時間も自由にはならない。私が出たときは先輩から五分おきに戻っていったが、十数人いると最初と最後で一時間以上睡眠時間が違うことになる。

まあそれはやむを得ないことと受け容れるしかない。何につけてもそうだが、道場では「好



きなことをする」のではなく、「することを好きになる」能力を養うのである。

それにしても並び夜坐などしていると、いろんなことがあって面白い。真冬には吹雪の中で坐ることもあるから、それぞれ呼吸法など工夫して自分で温まるしかないのだが、あるとき誰かが着物と衣の間に新聞紙を挟むと温かいといつて、何枚も入れたまま坐っていた。確かに温かいらしく、彼は坐ったまま眠ってしまった。冬山で独りだったら遭難していただろう。しかし幸か不幸か周りにはまだ大勢の雲水たちが一列に坐っており、その中で彼はカサカサ新聞紙の音をたてて背中から転倒したのだった。

役寮の雲水が警策けいさくを持ってきて彼は素直うすくまに蹲すまってその背中に受けた。紙を叩くあまりに明るい音が吹雪に吸い込まれていった。役寮も、最後は笑いながら叩いていた。

先輩方が戻ったあと、新到しんとうだけになると食べ物を食べることもあった。一番人気はチョコレートだろうか？ なかには小さな瓶に酒など持ってくる人もいた。二年目になると面倒をみるべき後輩がいるから、私もそうしてもらったように偶たまに食べ物差し入れたりした。塀の外に出られる雲水に頼んだり、あるいは休みの日に買ったものを単箱という自分専用の場所にしまっておくのである。

しかしそうは言っても、大部分の夜坐は真面目に坐っているのである。季節によっては牛蛙がえるの太い鳴き声が響き、また寂しげな猿の声も嵐山の奥の方から聞こえてくる。その時々で想うことはさまざまだが、それらを全て見ていたのはお月さんだろう。おそらく道場にいる間で、月が雲に隠れていたり雨や雪が降っていないかぎり、我々は月を仰がなかった日はないだろうと思う。

禅語では仏性を月に託して語ることが多い。どこの水にも映る月は誰にでも具そなわっている仏性を意味するのだが、その背景にはたぶんこうした夜坐の体験があるに違いない。